「道徳の時間」学習指導案

安芸高田市立吉田小学校
教諭　　出元　永子

１　日　時　　平成 24 年１月 11 日（水）
２　学　年　　第３学年１組　男子 15 名　女子 15 名　計 30 名
３　主題名　　ふるさとの伝統と文化を大切に　４－（５）
４　本時のねらい

郷土芸能「神楽」に関わる人々の思いや願いを知ることを通して，郷土の大切さを理解し，郷土に積極的に関わろうとする心情を育てる。

５　資料名　　「つながる神楽」（自作資料）
６　主題設定の理由

○　主題観

本主題は，小学校学習指導要領第３章道徳の内容項目４－（５）「郷土の伝統と文化を大切にし，郷土を愛する心をもつ。」を基に設定したものである。

郷土を愛する心とは，郷土に対して積極的に関わり，郷土をより良くすることに貢献し，伝統と文化を更に発展させようとする能動的な心であると捉える。地域行事に進んで参加し，楽しむようになってくる第３学年の発達段階では，郷土を愛する心を育む上で，地域の人々や生活，文化，伝統に親しみ，それを大切にし，郷土に積極的に関わっていこうとする心を育むことが重要である。

○　児童観

本学年の児童は，社会科の学習で，実際に地域に出て人々の生産や販売について調べたり，日常生活でも，祭りや地域行事に参加したりして，地域の様子に興味をもち，地域での活動も活発になってきている。祭りや地域行事では，人々や出店，催しなどの賑わいを楽しんでいる様子が見られるが，それを支える人々の思いや願いに十分気付いているとは言えない。地域の伝統芸能である神楽は，地域の祭りで上演されることが多く，児童にとっては身近である。しかし，神楽の雰囲気を感じているだけの児童，客席で鑑賞している児童，子ども神楽団に入っている児童など，神楽との関わりはさまざまである。これらのことから，児童の中には，郷土の伝統や文化を身近に感じてはいるものの，それらに関わる人々の思いや願いなどを十分に理解しているとはいえない者もおり，個人差もあるといえる。この授業を通して，地域の伝統と文化に関わる人々の思いや願いを知り，郷土の大切さを理解し，郷土に積極的に関わっていこうとする心を育んでいきたい。

○　資料観

本校が位置する安芸高田市は，郷土芸能の神楽が盛んな地域である。児童の日常生活にある神楽を素材とした資料に，児童は親しみをもって考えを深めていくことができると考える。また，社会科で，地域の文化財や年中行事の学習も控えており，それと関連させることで，より郷土を愛する心を育むことができると考える。本資料は，本校の地元の神楽団である，吉田神楽団の方のお話を基に作成したものである。古くは江戸時代から継承されている神楽団もある中で，吉田神楽団は結成以来 40 年の歴史の新しい神楽団である。自分達の吉田神楽団を大切にする姿，古いものを受け継ぎつつ，ふるさと吉田の歴史を描いた「元就公」を生み出し，現在も大事に舞っている人々の思いや願いは，郷土を愛する心そのものである。また，本番の臨場感は，地域住民も声援で神楽を支え，舞う側もみる側も一体となって伝統文化を支えているといえる。児童は，資料の主人公の気持ちを考えるなかで，神楽について新たな価値を見出すことができると考える。そして，神楽だけでなく郷土に伝わる他の祭りや地域行事について，今までの自分の関わり方を振り返り，これからの自分の関わり方を考えていくことにつなげることができる資料であると考える。

○　指導観

指導に当たっては，資料開発で情報提供してくださった吉田神楽団の方に，ゲストティーチャー（ＧＴ）として授業に参加していただき，次のような工夫を行う。導入では，神楽について想起させ，ＧＴに鬼の面をつけて舞ってもらい，資料への関心，意欲を高めていく。展開前段の資料提示では，ＧＴに手打ち鉦の演奏とその解説をしてもらい，練習がつらくなった主人公の気持ちに迫らせる。さらに中心発問では，神楽団の練習風景などのＶＴＲを流し，ＧＴに解説してもらった上で，主人公の気持ちをワークシートに書かせる。展開後段では，神楽だけでなく，吉田の祭りや地域行事に対するこれまでの自分の関わりを振り返らせる。終末では，神楽を通してこれからも郷土を大切にし続けていくＧＴの思いや夢を語ってもらい，本時の学習の余韻をもたせたい。以上のような工夫を行うことで，児童が心を揺り動かし，一層考えを深め，郷土を大切にし，郷土に積極的に関わっていく心を育てたい。

7　本時の展開

	学習活動	主な発問と児童の心の動き（◎中心発問）	神楽団の方(GT)の関わり	留意点（○）評価（☆）
導入	1　郷土の祭りや伝統行事について想起する。	○　神楽について知っていることはありませんか。 ・鬼やおろちが出て来ておもしろい。 ・吉田の祭りでみることができる。 ・安芸高田市は神楽がさかんだ。	【資料提示】 鬼の面を被って登場してもらい，資料への関心・意欲を高める。	○　神楽について想起させ，資料への関心・意欲を高める。
展開前段	2　資料「つながる神楽」の前半を聞いて，話し合う。 (1)神楽団に入ることにしたたかし。	○　たかしは，どんな気持ちから，「ぼく，神楽団に入るよ。」と言ったのでしょう。 ・お父さんがすすめてくれた。 ・神楽が好き。 ・神楽はかっこいい。		○　たかしが神楽団に入ると決めた時の気持ちを問い，たかしにとって，神楽は，「格好いい」という価値観であることに気付かせる。
	(2)練習がつらくなった時のたかし。	○　へとへとになったたかしは，どんなことを考えていたでしょう。 ・どうしたらできるようになるかな。 ・がんばらないといけない。 ・しんどいな。 ・腕がだるくなって大変だ。 ・上手にできないからいやだ。 ・もうやめたい。	【資料提示・助言】 手打ち鉦の演奏の仕方を解説してもらったり，迫力ある場面の実演をしてもらったりして，練習がつらくてやめたいくらいの気持ちになった，たかしの様子に共感させる。	○　練習がつらくなった時のたかしの気持ちを問い，練習する意欲がなくなってきたことに気付かせる。
	3　資料「つながる神楽」の後半を聞いて，話し合う。 (1)おじいさんの話を聞いた時のたかし。	◎　おじいさんの話を聞いた時のたかしはどんな気持ちになったのでしょう。 ・吉田神楽団みんながんばっている。あきらめたらおじいさんや神楽団の人に申し訳ない。 ・ここであきらめたら恥ずかしい。ぼくも，おじいさんや大人の神楽団のようにがんばろう。 ・「元就公」は吉田神楽団だけのものでとても大切だ。 ・「元就公」をお客さんにみてもらいたい。	【資料提示・助言】 神楽団の様子や練習風景のＶＴＲを基に，「元就公」についての思いや願いを語ってもらうことで，神楽に対する価値を捉えさせる。	○　神楽に携わる人々の思いや願いを理解させることで，練習する気持ちになったたかしの気持ちをワークシートに書かせる。 ☆　たかしにとって神楽がより大切なものになり，積極的に神楽に関わろうとしていることを捉えている。
	(2)本番を終えた時のたかし。	○　たかしは，どんな気持ちで「はい。」と答えたのでしょう。 ・おじいさんが喜んでくれて嬉しい。 ・みんなが喜んでくれて嬉しい。 ・みんなが神楽を楽しみにしてくれている。次も，神楽をがんばるぞ。 ・神楽をこれからもずっと続けるぞ。	【助言】 本番で舞う人もみる人も一体となったときに感動した体験を語ってもらい，みんなが神楽を大切にしていることを捉えさせる。	○　本番を演じて気付いたことをもとに，神楽のあるこの町を大切にし，自分もそれに関わりたいというたかしの気持ちを押さえる。
展開後段	4　祭りや地域行事に自分が取り組んだことを出し合い，祭りや地域行事に対するこれまでの自分の関わりを振り返る。	○　吉田の祭りや地域の行事に自分が関わったことを教えてください ・ぼくは神楽の練習が大変だったけれど，子どもの大会でがんばった。 ・家族が祭りの準備をしている所についていった。自分も手伝った。 ・４年生が，一心祭りで元気よく踊っているのを見た。		○　管弦祭，一心祭り，市入りなどの写真を提示し，吉田の祭りや行事への関わりについてこれまでの自分を見つめさせる。

終末	5　神楽団の方の説話を聞く。	○　ＧＴの方のお話を聞きましょう。 ・吉田には素敵なものがたくさんあるな。 ・吉田はいい所。大切にしたいな。 ・ふるさとはたからものだ。	【説話】 神楽を通してこれからも郷土を大切にし続けていく，ＧＴの思いや夢を語っていただく。	○　神楽団の方の説話の後，心のノートの一節「わたしのふるさとに住む人びと，生活，自然や文化，それらはすべて，わたしのたからもの。」を読み，本時の学習の余韻をもたせる。

つながる神楽

ぼくは、小学三年生。小さいころから、祭りや町の行事に行っては、神楽をみてきた。家にも神楽のビデオがあるので、それをみながら神楽ごっこをしている。たいこやチャンチキ（手打ち鉦）、ふえの音に合わせて、その日も神や鬼になって舞っていた。すると、お父さんが、

「たかし、子ども神楽団に入るか。」

と言った。少し考えたが、神楽をみる時、いつもかっこいいなと思っていたので、

「ぼく、子ども神楽団に入るよ。」

と答えた。

最初は、楽の練習からだ。ぼくは、チャンチキをすることになった。楽ふがないから、習ったことをしっかりおぼえないといけない。でも、神楽団の人たちが親切に教えてくれて、ぼくは、思ったより早くおぼえることができた。いい音も鳴るようになってきた。

そして、いよいよぼくも、祭りに出ることになった。演目は「元就公」だ。祭りにむけての練習が始まった。しかし、舞う人の動きに合わせて、音を鳴らすのは、とてもむずかしかった。

「たかしくん、ここもっとはげしく鳴らして。もう一回やるよ。」

神楽団の人の声が飛んできた。一番もり上げないといけない場面なのに、はく力のある音が出ない。何回練習しても、同じ注意を受けた。うでもだるくなって、リズムまで合わなくなった。「できるようになるのかなあ。」ぼくは、つかれて、へとへとになってきた。

しばらく休けいすることになり、ぼくは、みんなの練習をみることにした。すると、練習をみていたおじいさんが、ぼくの方へ近づいてきて、話を始めた。

「わしは昔、吉田に神楽団がなかったころ、吉田にも神楽団をつくろうと思うて、神楽を練習し始めたんよ。大人になってから始めたけえ、仕事がすんで、夜おそくまで練習したもんじゃ。よその神楽団へ習いに行ったこともある。お客さんの前ではじめて舞えた時は、うれしゅうてうれしゅうてのお。――わしは、もう神楽は舞えんが、今、こうやって、大人も子どももいっしょになって、一生けんめい練習しとる。それがうれしいん

よ。」

おじいさんは話を続けた。

「そうそう、たかしくん、この『元就公』はな、吉田神楽団がつくった神楽なんじゃ。」

「ええっ。」

「どこにもない吉田神楽団だけの演目(えんもく)じゃ。大人のメンバーは、『元就公』をつくった先ぱいたちの気持ちを大切にしとる。吉田いうたら毛利元就。「元就公」は、神楽団の看板(かんばん)じゃ。お客さんに吉田を知ってもらう、見てもらうという意気込(ご)みで舞っとる。」

昭和３０年 竹村正幸さんのグループが初めて発表した舞台
（竹村正幸さん提供）

――じっと聞いていたぼくは、すっと立ち上がり、声をあげた。

「練習してきます。」

ぼくは、みんなの所へ走った。

祭りの日、会場はにぎわっていた。ぶ台からは、神楽をみに来ている大ぜいのお客さんが見えた。ぼくの家族、ぼくの友だち、近所の人たち、そして、この前、話をしてくれたおじいさんも見つけた。

「たかし、たくさんの人が神楽を楽しみにしてくれとるね。」

とお父さんが言った。ぼくは、がんばろうと思った。

いよいよ本番。ぼくは、舞っている友だちの気持ちになって、一生けんめいチャンチキを鳴らした。もり上げる場面も上手くいった。大きなはく手が聞こえてきた。お客さんの顔がパッと明るく見えた。そして、笑顔でうなずくおじいさんと目が合った。ぼくは、うれしかった。

終わって、礼をするとき、お客さんが大声で、

「また、来てよ。」

とさけんでくれた。

「はい。」

ぼくは、心の中ではりきって答えた。